



TITLE:

描画対話法に基づく都市認識アプローチによる居住のデザインに関する研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

太田, 裕通

CITATION:

太田, 裕通. 描画対話法に基づく都市認識アプローチによる居住のデザインに関する研究. 京都大学, 2020, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22433>

RIGHT:

京都大学	博士（工学）	氏名	太田裕通
論文題目	描画対話法に基づく都市認識アプローチによる居住のデザインに関する研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、都市・地域の形成および変化は、その居住者が人間－人工物－自然の関係性に対してもつ価値づけが集合的に反映されて生じると捉え、居住者自らが価値づけを育む過程に関与することを通じて都市デザインを導く「居住のデザイン」理論に着目し、これを実践する新たな方法を開発したものである。社会の多様化、産業・技術の高度化が進む現代にあって、国内外の都市市街地の特性評価には、人口や土地利用分布等の標準化された都市計画的基準の達成度や地理・環境分析等に基づく基礎的計測情報などの従来型指標では不足となっており、個々の居住者が育む価値づけの集合としての地域理解にアプローチし、内発的変化の可能性をいかす包摂的な将来デザインとしての居住のデザインが重要となっている。しかし、個々の居住者が有する価値づけは本来個性的で予見困難であり、対話的方法により扱う必要があることから、本論文では従来の対話法にスケッチ描画を導入し居住者の考えに柔軟にアプローチする描画対話法を新たに発案し、描画対話法の成果と都市構造との間の客観的關係性である「都市認識」が実地に有用性ある新知見をもたらすことを3種の市街地における適用検証から示し、居住のデザインの実践法として「都市認識アプローチ」を完成させた研究であり、全7章から構成されている。</p> <p>第1章では、研究の背景から、分野横断的に既往研究を参照しつつ居住のデザインの重要性を示し、本研究で新たに発案する対話法とこれを用いる都市認識アプローチに求められる要件、さらに対話法の開発にあたっての初期設定について述べたうえで、研究の目的と方法を述べている。</p> <p>第2章、第3章は第1部として描画対話法の開発を扱っている。第2章では2段階の被験者実験を通じて対話へのスケッチ描画の導入を発案し、描画対話法の初期案を作成している。初期案は、対話の前半に被験者が様々に口述する居住の価値づけをスケッチに図像化して即時に外在化しておき、対話の後半にそのスケッチ群の検証・修正と対話のさらなる精緻化のプロセスを設けるもので、approacher というスケッチを描く新たな役割を導入し、被験者・approacher・全体進行を担う facilitator により進行するものとして作成している。</p> <p>第3章では、京都市西陣地域の伝統産業に関わる居住者7名を被験者として初期案を適用し、その対話成果にボーム・ダイアログの原理を援用して得られたフィードバックにより、対話の進め方と方向性、外在化の方法、対話環境の設定の3項目の実施方針を明確化している。この3項目に加え、実施状況の再現図としての描画対話録の作成法を含めて、描画対話法の確立に至っている。</p> <p>第4章から第6章は第2部として描画対話法の適用検証を扱い、対話の成果を用いて都市認識を把握する都市認識アプローチの有効性を検討している。第4章では、京都市西陣地域において第3章で行われた対話の成果から得られる都市認識を、分析している。国内外で広くその名を知られる西陣地域は、一般に伝統産業に関連する生業・生活の分布歴から上京区を中心とした都市計画的領域として扱われる。しかし対話成果の分析からは、被験者である居住者ごとに、西陣の生業・生活が成立していると認</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	太田裕通
<p>識するに必要と考える価値づけは、個別性が高く、それぞれの価値づけを十分に 領域として得られる西陣地域の都市認識にも明確な個別性が見られ、一般的な西陣地 域の扱いでは捉えられていないことが確認されている。さらに得られた価値づけの集 合として提示した都市認識に関わるディスカッションテーブルに対して全被験者が肯 定的評価を示したことから、都市認識アプローチの有用性を確認している。</p> <p>第5章では、前章の西陣地域的一部分にあたる、京都市紫野地域を対象に描画対話 法を適用して、居住者が自発的関与行動をとるミクロな価値づけ領域である「自地域」 の存在を発見している。これにより紫野地域に有志管理の公私の環境が点在している 実態は自地域の反映として説明されること、西陣地域とは異なるミクロスケールの日 常生活域に内在する自律的な住環境形成秩序を、都市認識アプローチにより見出せる ことを示している。さらに、approacher は対話参加経験により、居住者と比して断片 的であるものの自身の紫野地域に対する価値づけを獲得している場合があることを発 見している。</p> <p>第6章は、インドネシア・ジャカルタ北部の、Kampung Kota（都市カンポン）と呼 ばれる高密度集住地を対象として適用検証を行っている。外見的に無秩序なスラムと みなされてきた高密度集住地については、一部の研究者が、無秩序ではなく居住者間 に内在する秩序により自己組織化されているとの推測を提起している。そこで、前章 で得られた「自地域」に着目して描画対話法を適用した結果、個人や各種のグループ がそれぞれ「自地域」とする領域が集住地の各所に複層的に存在し、一見無秩序にみ える複雑な空間の各部やそれらの頻繁な変更が、複層の自地域の相互配慮により実現 され、こうした集合的秩序をもって集住地が組織化されていると実証することに成功 している。これによりジャカルタ大都市圏に広範囲に存在する同様の高密度集住地の 将来デザインに、都市認識アプローチによる居住のデザインを用いることは有効であ ることを示している。</p> <p>第7章では、第2章から第6章の成果を総合考察し、描画対話法の完成形を示し た上で、これを用いた都市認識アプローチにより、従来の都市計画的指標では扱われ ていない、都市・地域に集合的に作用する居住者の価値づけ群と、その作用に相応す る都市構造が発見できることを総括し、都市認識アプローチが居住のデザインの実践 法として有用であることを述べている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、都市計画的な標準化された指標では捉えられていない、都市・地域の形成・変化を地域固有に生じさせる自律性を支援する、居住のデザイン理論に基づき、居住者の自らが関与する地域に対してもつ価値づけを捉える描画対話法と、その成果から得られる都市認識の集合的反映として、居住地の形成・変化を理解する都市認識アプローチの方法を開発したものである。この方法により、京都市およびインドネシア・ジャカルタ北部の市街地において、未解明であった居住地の自律的な形成・変化秩序の存在を明らかにし、都市認識アプローチの有効性を示したもので、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 予見なく居住者のもつ地域への価値づけを知る対話法として、口述を即時にスケッチ描画する approacher という役割を導入し、描画とその検証・修正プロセスを有する対話法として描画対話法を開発した。
2. 描画対話法を京都市・西陣地域において適用し、居住者が西陣であることを同定する価値づけとそれを十分とする領域が、汎用されてきた都市計画的領域とは異なり個別性があることを示し、都市認識アプローチへの肯定的検証結果を得た。
3. 京都市・紫野地域への適用により、居住者が自発的関与行動をとるミクロな価値づけ領域である「自地域」を発見し、その反映が有志管理の公私の環境の存在を説明することを示し、居住地の形成・変化の自律的秩序を見出した。
4. インドネシア・ジャカルタ北部の高密度集住地への適用により、無秩序なスラムと見なされてきた居住地に「自地域」を確認し、居住者間の複層的な価値づけの相互配慮として集合的秩序があることを明らかにし、集住地に内在する自己組織化を見出した。
5. 以上の結果から、描画対話法により得られる価値づけと都市認識から地域を理解する都市認識アプローチは、看過されてきた地域の自律的秩序を知る方法として有効で、居住のデザインの実践法として有用であることを示した。

以上のように、本論文は、都市市街地において社会の変動や産業・技術の高度化が進み、柔軟かつ包摂的な形成・変化を扱う都市施策が至急に求められる中、従来の都市計画的指標では扱われていない、地域固有の自律的秩序に相応する内発的な市街地の将来デザインを導く具体的方法を示したもので、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行い、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。

要旨公開可能日： 年 月 日以降